

【 顯榮祭のトロパリ 第7調 】

ハリスト スか みよ、なんぢ は や ま に お い て へ ん
神 爾 山 於 變
よ う し て 、なんぢ の もん と に そ の ち か ら に か
容 爾 門 徒 其 力 稱
な い て なんぢ の こ う え い を あ ら わ し た ま
爾 光 榮 顯 給
え り 。 ね が わ く は し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ
願 生 神 女 祈 禱 因
り て 、 わ れ ら つ み な る も の に も なんぢ の え
我 等 罪 者 爾 永
い ざ い の ひ か り は か が や か ん。 ひ か り を ほ ど
在 光 輝 光 施
こ す し ゅ よ 、 こ う え い は なんぢ に き す 。
主 光 榮 爾 歸

【 顯榮祭のコンダク 第7調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
何 時 世 世
ハリスト スか みよ、なんぢ が や ま に お い て へ ん よ う
神 爾 山 於 變 容
せ し と き 、なんぢ の もん と は い る る に か な
時 爾 門 徒 容 稱

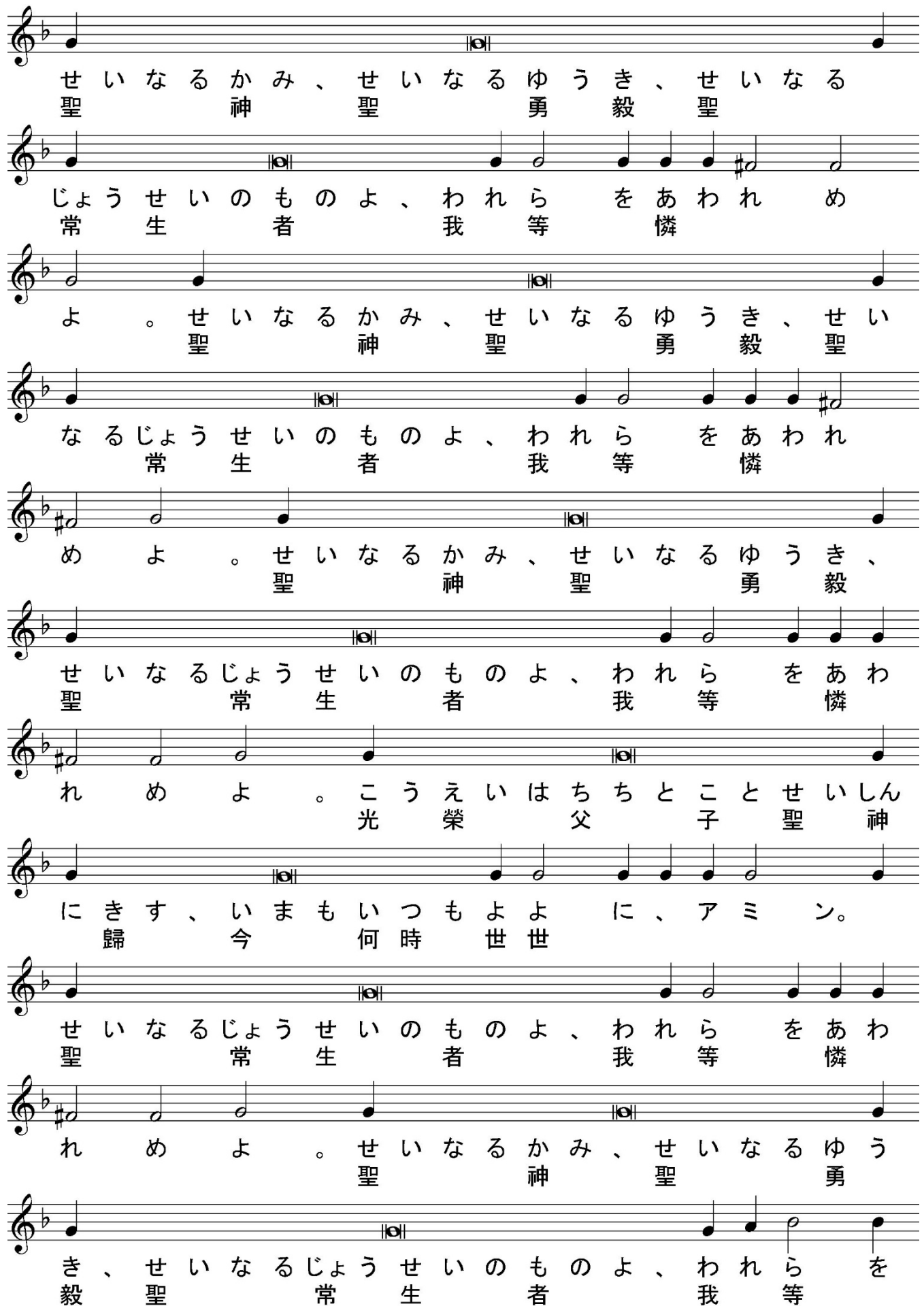
い て な ん ぢ の こ う え い を み た り 、 こ
 爾 光 榮 見 此
 れ な ん ぢ の じ ゅ う じ か に て い せ ら る る を み て 、
 爾 十 字 架 釘 見
 く る し み の じ ゅ う な る を さ と り 、 な ん ぢ が
 苦 自 由 悟 爾
 じ つ に ち ち の こ う え い な る を せ か い に つ た
 實 父 光 榮 世 界 傳
 え ん た め な り 。
 爲

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
 となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
 り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に
 痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる
 もの者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
 と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
 なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

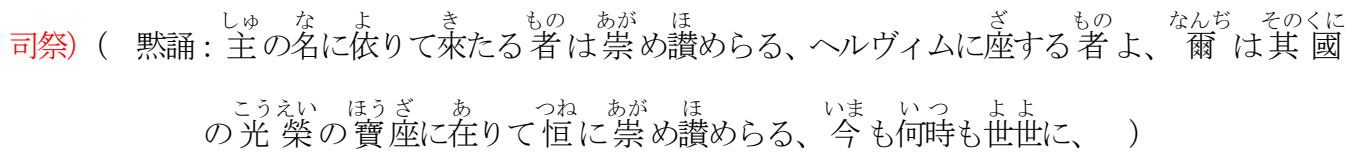
司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】



せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
神 に き す 、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン 。
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を



司祭) 慎^{つつし}みて聽^きくべし、衆^{しゅうじん}人に平安^{へいあん}、

えいち
司祭) 睿智、

わ たましい しゅ ほ あ しゅ わ かみ なんぢ いた おおい
 誦經) 我が 靈 よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾 は至りて大なり、

誦經) しゅ なんぢ しわざ なん おお
主よ、爾の工業は何ぞ多き、

司祭) えいち 睿智、

せいしと こうしょ よみ
誦經) 聖使徒ペトルの公書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄 弟よ、^{ますますべんれい} 益 勉 勵して、^{なんぢら め} 爾 等の召されし事、^{こと およ えら} 及び選ばれし事を堅固にせよ、^{こと けんご} 此等を

^{おこな} 行 いて、^{なが つまづ} 永 久 躓 かざらん。^{けだし か} 蓋 此くの若くば、^{なんぢら われら} 爾 等に我等の主 救 ^{しゅきゆうしゅ} 主 イイススハリス

^{えいえん} トスの永 遠の國に入る恩 恵は ^{い おんけい} 裕 に ^{ゆたか} 加 えられん。故に ^{ゆえ} 爾 等此を知り、^{かつすで} 且 既に受けたる

^{しんじつ} 眞 實に堅められたれども、^{われ つね} 我は恒に ^{なんぢら} 爾 等に ^{こと} 此等の事を記念せしむるを ^や 思めざらん。我は

^こ 此の幕に在る時、^あ 此の記念を以て ^こ 爾 等を勵ますは、^{もつ} 當 然の事なりと思えり、^{なんぢら} 蓋 ^{はげ} 我は

^わ 我が幕を脱せんことの ^{ちか} 近きを知る、^わ 我が主 イイススハリストスの ^{しゅ} 我に示ししが如し。然れ

^{われ} ども我は我が去らん後にも ^わ 爾 等の常に ^{つね} 此等を記念することを勉めん。蓋 ^{これら} 我等は、^{きねん} 巧

^{きよせつ} なる虚 説に ^{したが} 従 いて、^{なんぢら} 爾 等に ^わ 我が主 イイススハリストスの ^{しゅ} 能 力と ^{のうりよく} 降 臨とを ^{こうりん} 告げしに ^つ 非

^{すなわち} ず、^{そのいこう} 乃 其威光を親しく見たる者として然せり。蓋 ^み 至大なる ^{もの} 光 榮より ^{しか} 聲の彼に來り

^{これ} て、^{われ} 此は ^{しあい} 我の至愛の子、^わ 我が ^{よろこ} 喜 べる者なりと ^い 曰いし時、^{とき} 彼は ^{かれ} 神 父より ^{かみちち} 尊 貴と ^{そんき} 光 榮とを ^{こうえい}

^う 受けた。天より來りし ^{てん} 此の聲は、^{きた} 我等 ^こ 彼と ^{こえ} 偕に ^{われら} 聖なる ^{とも} 山に在る時、^{せい} 之を聞けり。且 ^{やま} 我

^ら 等に ^{さら} 更に ^{たしか} 確 なる ^{よげんしゃ} 預 言 者の ^{ことば} 言 あり、^{なんぢら} 爾 等が ^{これ} 之を ^{くら} 暗 きの ^{ところ} 處 に ^{かがや} 耀 く ^{ともしび} 燈 として、^{てんあ} 天明

^{あさのほし} け、^{なんぢら} 晨 星の ^{こころ} 爾 等の ^い 心 に ^{いた} 出づるに ^{かえり} 至るまで ^よ 顧 みるは善し。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしてください。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、また、いま持っている真理に堅く立ってはいるが、わたしは、これらのことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。わたしがこの幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが適当と思う。それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたしに示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であることを知っているからである。わたしが世を去った後にも、これらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう。わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。

【 アリルイヤ 顯榮祭第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{てん なんぢ ぞく ち なんぢ ぞく} 天は 爾 に屬し、地も 爾 に屬す、



誦經) ^{ラッパ よびごえ し たみ さいわい} 角 の呼聲を識る民は 福 なり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 淨 き光 を輝 かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾 の 喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所 を思い且つ 行 いて、屬神の生活を通るを致させ給え、 蓋 ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、 爾 は我が 靈 と體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至

ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
善にして生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン
福音經 マトフェイ福音書 70 端 17 章 1～9 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き か と き たづさ ひとりかれら ひき
謹みて聴くべし、彼の時、イイススはペトル、イアコフ、イオアンを携え、獨彼等を率

いて、高き山に登り、彼等の前にて容を變えたり、其面は日の如く耀き、其衣は

光の如く皎くなれり。視よ、モイセイ及びイリヤ現れて、彼と與に語れり。時にペトル

イイススに謂えり、主よ、我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の廬を建

てて、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。彼が尚言う時、視

よ、光れる雲は彼等を蓋い、且雲より聲ありて云う、此は我の至愛の子、我が喜べる者

なり、彼に聴け。門徒聞きて俯伏し、懼ること甚し。イイスス就きて、彼等に觸れて曰

えり、起きよ、懼るる勿れ。彼等其目を擧げて、獨イイススの外に誰をも見ざりき。山を

くだるとき、イイスス彼等に戒めて曰えり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる

ことを人に告ぐる勿れ。

(比較用 口語訳) イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。ペテロはイエスにむかって言った、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。もし、おさしつかえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。

弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ、顔を地に伏せた。イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言われた、「起きなさい、恐れることはない」。彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった。一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主光栄爾歸光栄

はなんぢにきす。
爾歸

※聖体礼儀③ へ